青山国際政経論集 96 号，2016 年 5 月

研究ノート

『改造』座談会にみる左派知識人のスペイン内戦観（1936 年 9 月 4 日開催）

渡　邊　千　秋*

はじめに

『改造』は，改造社の山本実彦によって 1919（大正 8）年に創刊された総合雑誌である。『中央公論』『日本評論』『文芸春秋』などと並んで四代総合雑誌とされ，一般的には，この 4 誌のなかでも最も進歩的な路線を踏襲しているとみられていた[1)]。社会主義弾圧の世情とともに次第に権力批判の声はトーンダウンしていったとはいえ[2)]，堺利彦，山川均，荒畑寒村，小林多喜二などの社会主義に近い人物や，大杉栄のようなアナーキストなどを常連の執筆者としてむかえ，また牧師でありキリスト教社会運動家であった賀川豊彦の小説『死線を越えて』を連載するなど[3)]，知識人のみでなく労働者階級の人々にも多大な影響を及ぼした「左派的」な傾向の強い雑誌であったと評価されている[4)]。

果たしてそのような強い「左派的」な傾向をもつ雑誌として人々に印象づけられた『改造』は，まさに当時のヨーロッパ，いや世界中のまなざしが一斉に

*　青山学院大学国際政治経済学部教授

1）　高崎隆治『戦時下のジャーナリズム』新日本出版社，1987 年，pp. 129–130.

2）　濱崎望「第 2 章　総合雑誌『改造』の自己意識」鹿児島純心女子大学国際文化研究センター編『新薩摩学：雑誌改造とその周辺』南方新社，2007 年，p. 76.

3）　賀川の自伝的作品は，改造社初の単行本『死線を越えて』として 1920（大正 9）年 10 月に発刊され，20 万部を超えるベストセラーとなった。犬塚孝明「第 1 章　ジャーナリスト山本實彦」鹿児島純心女子大学国際文化研究センター編『新薩摩学：雑誌改造とその周辺』南方新社，2007 年，pp. 44–45.

4）　太田哲男『若き高杉一郎：改造社の時代』未来社，2008 年，pp. 26–27.

© Aoyama Gakuin University, Society of International Politics, Economics and Communication, 2016

向けられていたスペイン内戦という大事件を，日本の読者にどのように伝えようとしたのだろうか。本稿では，1936 年 9 月 18 日印刷納本，同年 10 月 1 日発行の『改造』第 18 巻第 10 号に掲載された座談会記事に焦点をあてて考察してみたい[5)]。

秋季特大号と名付けられた『改造』昭和 11（1936）年 10 月号では「西班牙の内亂」という特集が組まれた[6)]。この号では，巻頭を飾る「西班牙内亂画報」というタイトルの「特撮グラビア」を通じて，異国の地スペインでいったい何が起こっているのか，スペインに関する多くの知識をもたない読者に視覚的に伝達しようとする努力がみられる[7)]。もちろん，一連の写真のみでは読者に現実を理解させるのが困難な状況において，文字による状況説明は重要な役割を果たした。巻頭特集には横 4 人から 5 人の列になって街路を歩く労働者とおぼしき人々の後ろ姿をやや高い場所からとった写真とともに，

> 人民戦線派勝つか？ 叛亂革命軍勝つか？ 全世界の眼は西班牙に集まってゐる。闘牛士の國は變じて戰闘の巷となつた。労働者，市民より成る義勇軍と，秩序ある正規兵との戰ひ――西班牙は今内亂のルツボだ[8)]

という，キャプションの文字が踊る。これらの文字がなければ，グラビアには単に群衆がみえるだけであって，いったい何が写されているのかを判断することは困難だろう。

ページを繰ると，見開きページ中央にスペインとその周辺国の地図が掲載されている。イベリア半島・アフリカ北岸・フランス南部そしてバレアレス諸島

5） 本稿では，これ以降「座談会」と表記した場合には，この号の座談会記事をさすものとする。また『改造』からの引用を行う場合には，1930 年代半ばの原文表記を尊重し，できるかぎり現在の常用漢字に改めることはしない。記事中の人名・地名などの表記に関しても同様に，引用部分では当時のまま記すものとする。

6） なお，雑誌の顔である表紙に記されたもう一つの特集タイトルは「日支の新紛争：国策と世論」であった。

7） 『改造』第 18 巻第 10 号，1936 年。全体では 16 ページに及ぶが，ページの記載はない。また掲載された写真に関する詳細分析は，今後の研究課題としたい。

8） 『改造』第 18 巻第 10 号，1936 年，ページ記載なし。

が描かれ，20 余の主要都市名と政府軍・叛軍それぞれの支配領域が書きいれられたうえで，次のような説明文が向かって右側のページに添えられているのに気がつく。

> 七月十八日未明モロツコ駐屯軍に依て火蓋を切られた西班牙の叛亂は，之れに呼應した本土の各地兵營に波及し，僅々二日間に全都市の半數以上が叛軍の手に歸し一擧フアツショ獨裁成るかと思わせたが，正規軍の一部と市民義勇軍の頑強なる抵抗に依り，一兩日にして叛軍はマドリツド，バルセロナ，ヴアレンシヤ等の重要都市を放棄した。爾來叛亂は長期戰の形をとり北方ブルゴスを中心とするモラ將軍の部隊と南方セヴイラを根據地とするフランコ將軍の部隊とが既に五十數日に亘つて各地の政府軍と交戰し戰亂は何日終熄するとも分らない。兩軍の兵力は政府軍叛軍ともに殆ど伯仲し，この種の内亂として戰鬪の激烈凄慘なる事，被害の甚大なる事，時期の長引ける事等に於て殆どその例を見ない。加ふるに獨伊と佛蘇との微妙なる關係に於て戰況は益々複雜化し，局面は一進一退して混沌を極めて居るが，この結果の如何は忽ち歐州全體の左右兩翼の對立を深め，影響する處大なる爲め，その成行きは全世界の文字通りの注目の中にある[9)]。

同じ見開きページ向かって左側には，叛乱軍の南軍司令官としてフランコ，北軍司令官としてモラの顔写真が掲載された。また右派の主要イデオローグだったカルボ・ソテーロの顔写真も「ソテロは七月十三日政府の警官に暗殺され今次叛乱の動因となつた」という説明文とともに載っている。対する共和国陣営については，「九月四日イルン陥落の日ヒラール内閣交迭し社會黨首領『スペインのレニン』との綽名あるキヤバレロが新内閣を組織した」というキャプションづきで，ラルゴ・カバリェーロの顔写真とアサーニャ大統領の顔写真が載っている。

こうして巻頭特集に掲載された白黒写真は，先に述べた主要人物 5 名の顔写

9）『改造』第 18 巻第 10 号，1936 年，ページ記載なし。

真を除くと，大小合わせて全部で 36 枚である。またモスクワの赤の広場で開催された「西班牙人民戰線のための反ファッショ示威運動」という説明文がつく 1 枚以外は，すべてスペイン国内・共和国陣営の支配領域で撮影された写真を使用していると推測できる。写真には，塹壕で銃を構える女性民兵，戦闘にむかおうとする男性民兵，空襲で破壊された病院らしき施設，右手のこぶしを握りしめ掲げて挨拶をする労働者たち，負傷者を運ぶ人々など，内戦下の前衛・後衛での人々の様子がみてとれる。それぞれの写真につけられた短いキャプションが，どういう状況下でとられた写真であるかを説明するが，しかしそれは，なぜスペイン人同士で戦わねばならないのかといった，読者が抱くにちがいない素朴な疑問を解決するにはほど遠いのであった。

このような視覚資料の「穴」を補完するべくたてられた企画が，同じ号の 77 ページから 97 ページまで掲載された「スペイン革命を繞りて」という座談会である[10)]。これは，東京都千代田区の東京会館で 1936 年 9 月 4 日に有識者を招いて開催された座談会記録をまとめたものであり，青木新，木村毅，布利秋，町田梓楼，美濃部亮吉，横田喜三郎といった当時の「知欧派」とでもいうべき人々が会して，スペインがおかれた状況を話し合ったものである。内戦へ至るまでの経過，戦闘の進展具合や結果予想はもちろんなされる一方で，話の合間にスペインの文化などにも言及が及び，国民性までをも描こうとしているのが興味深い。

本稿では，この座談会に参加した 6 名の知識人の言説を抽出し，彼らがスペイン内戦をどうとらえようとしていたのか，またスペインという国をどう理解していたのか把握したいと考える。

1. 座談会構成員について

まず，姓の五十音順で，座談会出席者の略歴を以下に述べておきたい。

10） この座談会ではカタカナ表記で「スペイン」としており，漢字「西班牙」は使用されていない。

青木新（1881–1970）

熊本県出身。東京帝国大学法学部から外務省に入省し，政務局に配属された。明治・大正・昭和にわたり 3 度外務大臣を務め，満州国における日本の権益をめぐり「焦土外交」を展開すべきとして物議をかもした内田康哉の秘書官であった。1927 年から 1931 年までメキシコ公使，1932 年から 1936 年まで駐スペイン公使の任にあった。1936 年 12 月退官。1937 年からは内田外相の伝記編纂にかかわり，膨大な草稿を残している[11)]。スペイン内戦に関連する著書に『西班牙動乱に就て』（中央朝鮮協会，1936 年），『情熱の国スペインの革命を語る』（今日の問題社，1936 年）などがある[12)]。

木村毅（1894–1979）

岡山県出身。早稲田大学英文科卒。編集者として春秋社にて活躍する一方で，評論活動にも従事した。明治文化，比較文学，大衆文学の研究分野を開拓したとされる。また，1924 年には日本フェビアン協会の創設に参加し，日本労農党の出版部長を務めた。社会大衆党に参加し，無産運動を展開した。多数の著作がある[13)]。

布利秋（1889–1975）

愛媛県出身。早稲田大学政経学部を中途退学，アメリカ合衆国へわたり，ジャーナリストとして働いた。以後世界の 50 あまりの国々を取材・放浪した旅行家である。スペインを訪れた経験を通じて，この国を芸術が生まれる国として評価していた。なお関連著作に『欧州の不安とスペインの動乱：それが極東

11） 内藤和寿「史料解題『内田康哉伝記草稿』について」『外交史料館報』7 号，1994 年，pp. 79–80.

12） なお青木が本座談会とほぼ同時期に東京経済倶楽部で行った講演会の抄録として，以下を参照されたい。川成洋「青木新とスペイン内戦：『スペインの動乱に就いて』をめぐって」『スペイン現代史』19 号，2010 年，pp. 66–70.

13） 高峰慧「木村毅」『大百科事典第 4 巻』平凡社．1984 年，p. 138.

にどう響くか』がある[14)]。また 1940 から 41 年にかけて第二次近衛内閣外務大臣の松岡洋右の要請を受け，内外情勢分析を行う私設顧問となった[15)]。

町田梓楼（1883–1955）

東京外国語大学卒業。『東京朝日新聞』パリ支局員としてのヨーロッパ滞在経験をもつジャーナリストである[16)]。同外報部長，同論説委員などを歴任した[17)]。

美濃部亮吉（1904–1984）

東京都出身。東京商科大学教授，美濃部達吉の子息。東京帝国大学経済学部でマルクス主義経済を学ぶ。同学部助手。ドイツへ留学，帰国後，法政大学に奉職した。人民戦線事件で，1938 年 2 月の第二次検挙者の 1 名として逮捕された。翌年法政大学経済学部教授を依願退職。第二次世界大戦後，1946 年には内閣統計委員会事務局長となった。1959 年からは東京教育大学教授。1967 年，東京都知事に就任し，1979 年までの 3 期にわたりその任にあった。1980 年には参議院議員に当選した[18)]。

横田喜三郎（1896–1993）

愛知県出身。東京帝国大学法学部卒業後，国際法学者として同校で教鞭をとった。1929 年ロンドン海軍軍縮会議に随行。満州事変を批判するなど，軍部批判の論陣を張った。第二次世界大戦後の 1948 年には，東京大学法学部学部長を務めた。1957 年退官。1960 年には最高裁判所長官に就任し，最高裁判所機構

14） 布利秋『歐州の不安とスペインの動亂：それが極東にどう響くか』今日の問題社，1936 年。これは，今日の問題社によれば，「時々刻々に起る各方面の問題にして何人もが一應知つて置かねばならぬものを最も分り易く解説して社會常識を供給」する目的で編集された一連のパンフレットの 1 冊である。

15） 若宮元一，田中皓正『布利秋伝』布利秋顕彰会，2003 年，pp. 55–56.

16） 江口修「松尾邦之助とパリその 2：狂乱の時代（承前）」『小樽商科大学人文研究』118 号，2009 年，p. 70.

17） 町田梓摟『現代フランス論』朝日新聞社，1946 年，p. 173.

18） 美濃部亮吉さん追悼文集刊行世話人会編『人間美濃部亮吉：美濃部さんを偲ぶ』リーブル，1987 年，pp. 230–232.

改革に取り組んだ。1981 年の文化勲章受章者である[19)]。

なお，『改造』誌面に座談会出席者として名前を連ねるのは上記 6 名であるが，それ以外に，姓名不詳の「記者」の会話が記されている。状況から見れば，この「記者」たる人物が座談会では議論の整理を行い，その場を切り盛りしたと思われる。くわえて，座談会の模様を写した写真には全部で 9 名の人物が写っている。座談会参加者 6 名は写真のどの人物か誰なのかわかるように記されているが，残りの 3 名については言及がない。現代のように音声を録音・記録するレコーダーなどの道具がない時代の座談会であることは，筆記記録者が同席していた可能性をうかがわせる。

2. 座談会発言内容からみるスペイン内戦像

2–1. 1936 年 7 月における軍部クーデタを「革命」として理解する

モロッコから始まった軍部クーデタは，座談会出席者にとっては第二共和政への叛乱ではなく，右翼の「革命」と捉えるべきものであった。たとえば，木村は次のように発言している。（なお，今後全ての下線は渡邊による。）

> アメリカの新聞で見ましたが，フランコがモロツコで兵を擧げる時に，革命は手に睡して成るべしと思つてゐたら，海軍の方で將校は反軍に加擔したが，水兵が案外言ふことを聽かないので，軍艦が動かん【木村】[20)]。

また，木村・町田・美濃部・布・横田の 5 名は，次に引用するように，発言でクーデタを起こした反乱軍を「革命軍」として扱っている。

> 攻める方から言つても，今の革命軍が長く戰爭するのは矢張長い宗教だと

19） 高野雄一編『国際関係法の課題』有斐閣，1988 年，pp. 387–392.
20）「座談会」p. 82. 本稿では発言者の姓を発言引用末尾に【　】にいれて表示する。ある発言者の会話と次の発言者と会話が連関する場合には，発言冒頭に姓を出して表示することとする。

か貴族制度だとか歴史の尾を引いてゐるから眞劍になれるのです【木村】[21]。

外務省で調べた所に依ると，地域的に革命軍は諸方を占領してゐるけれども，それが實際大勢を支配するかどうかは判らない【町田】[22]。

若し革命軍が勝てばジブラルタルをイタリアに持つて行かれる心配があり，どつちに轉んでもイギリスに取つては餘り好都合な條件には行かないから，決然たる態度が取れないんぢやないか【美濃部】[23]。

英國が四，五日前に提案したといふ，革命軍と政府軍とを結婚させる，聯立内閣を作るといふ案だが，それが出來るものなら，今のイデオロギーのやうな議論にはならんが……【布】[24]。

スペイン公使の革命軍支持ですね。あゝいふ例は珍しいんですが，余程革命軍との聯絡があつたんでせうか。【横田】[25]。

外務省官僚であった青木は，1934 年にアストゥリアスを中心に起きた鉱山労働者の動きを左翼革命と呼んでいる[26]。その一方で，フランコ率いる反乱軍を「革命軍」と呼ぶのに違和感を覚えるのか，周囲の言を多少変えて，「軍」の代わりに「派」を使用する折もみられた。

何だか革命派の方が景氣が好いやうにも見えますけれども，まだ本當の豫想は一寸付けかねますね【青木】[27]。

このように，「左派寄り」の雑誌だからといって，座談会出席者が軍部クーデタ批判，もしくは共和国擁護を展開するだろうと思って読み始めると，読者は

21）「座談会」p. 83.
22）「座談会」pp. 82–83.
23）「座談会」p. 92.
24）「座談会」p. 92.
25）「座談会」p. 94．ここでいうスペイン公使とは，1932 年から 1945 年までスペインの駐日公使であったサンティアゴ・メンデス・デ・ビゴを指す。
26）「座談会」p. 84.
27）「座談会」p. 95.

肩透かしをくらった気持ちになるであろう。1936年7月の内戦勃発後まだ2カ月という時間帯での座談会である，という点を割り引いても，どちらの側についても明確な批判も支持も表明しない出席者6名がそこにいる。彼らはある意味では冷静に，また時にはユーモアと明らかな偏見を交えながら，スペインで起きているできごとをまったくの他人ごととして分析しているのである。共和国政府がクーデタによっても崩壊しない理由は，民衆が政府を支持しているからという理由づけとともに，民衆が武装訓練を受けていることにあると言及していることにも注目したい。そのような訓練が「よいこと」なのか「わるいこと」なのかといった判断はなされていない。ただし，武装した民衆だから従来よりは強く，その彼らが共和国政府を擁護するのだから，共和国政権は倒壊せずにあって当然だという読みを持っていたようである。たとえば，青木は次のように述べている。

> 今のお話の民衆が政府の方に傾いてゐるといふこと，それは確かに今の政府の粘り強い一つの原因でせうね。その民衆なるものが普通の民衆とは違つて，詰りファッショに對しては，彼殺さずんば我殺さるといふ信念が普段から植ゑ付けられてゐる。社會主義者，共產主義者，アナル・コサンヂカリスト等の武装訓練が普段から行はれてゐる。武装的の民衆といふことになつてゐたから，普通の民衆よりは強い譯ですね【青木】[28)]。

このように，少なくとも座談会参加者の当日の発言のなかには，軍部クーデタ＝反革命という思考はみあたらない。彼らにとっては，フランコ将軍らによるクーデタはむしろ革命であった。その後1970年代にもなると，1936年座談会当時『改造』編集部に所属していた水島治男は「スペイン動乱にあたっては隣国のフランスをはじめとしてイギリス，アメリカから個人的な知識人たちが義勇軍となってスペインの人民戦線政府を防衛するため，そしてフランコ将軍の反革命軍と戦うべく，続々として，スペイン入りをして，あたかも国際的な

28）「座談会」p. 83.

市民戦争の観を呈し，独，伊はフランコ側に，仏，ソは人民戦線側について，武器の援助をしたりして，スペイン内乱は，各国の新鋭兵器を実験するためのモデル戦場と化したともいわれた。[29)]」と自著で後年に書いている。しかし，これはあくまで後付けの理解であり，水島の，反革命軍を率いる軍人としてフランコを理解しようという思考回路を，座談会参加者が共有していないのは明らかである。

2–2.　内戦原因への言及から国民性への言及への飛躍

青木元スペイン公使は，記者の求めに応じて，復古王政からプリモ・デ・リベーラ独裁そして第二共和政期にかけて，スペイン社会に存在していた対立構造について説明する。この状況説明は，冒頭 4 ページ半の長い独白になっており，全体で 22 ページの座談会の 5 分の 1 を占める。おおまかには，以下の発言部分が長い発言の要約であるといえるだろう。

> 私は今年の正月スペインを出發して日本に歸る途中で，左翼人民戰線が勝つたといふことを聞いて，何か又反動的な大きなことが起るといふことは豫想して居つたのでありますが，今お話ししたやうな工合で，政策の問題，感情の問題が非常に激化して，今度の右翼革命が勃發したといふことになつたのであります。それで大雜把に見れば，結局左右兩派の抗爭であるが，又これを裏から見ると左翼のマルクス主義者に對する所の反マルクス主義の爭である，或は左翼のカトリツク教會反對主義に對するカトリツク主義者の運動といふ風にも見られるし，又或る意味に於ては，地方自治分權主義に對する中央集權主義の爭も含まれ又左翼の無產獨裁の傾向を帶びてゐる政治に對してファッショ的國民的傾向を帶びている分子の反對，まあ斯ういふ風に色々見られるのであります。或は又今度の革命は軍人が中心となつて起したのであるから，主に軍人の運動であるといふ風に見る向きも

29）　水島治男『改造社の時代：戦前編』図書出版社，1976 年，p. 273.

あるでありませう。又もう一層大きな眼から見ると，現在のスペインは古いスペインから新しいスペインを生み出す惱みの中にあるといふ風にも見るべきものではなからうかと思ふのであります。【青木】[30)]。

青木は，スペイン国内の政治・社会状況について，政治勢力の分布などもふくめた詳細な情報とともに全体的な俯瞰図をを提示したのだが，他の参加者の反応からはスペインの内政に迫ろうとする深い意図は読み取れない。この点に関して，日本に帰国する直前までの濃密な現地体験からもたらされた青木の知識と比較すれば，他の 5 名の参加者は限定的な知識しかもちえないことは容易に想像しうる。そこで，記者が話題を別方向へ切り返し，封建的な要素が濃厚に残っているスペインの社会，古いスペインの情勢について述べるようにと布を指名する。布は，プリモ・デ・リベーラ独裁体制期（1923–1930 年）にスペインを訪れた自分の経験をもとに，スペインの封建的要素を示す実例として次のように述べる。

警察へ行つて許可證を貰ふにも，とても威張つたものです。私共外國人に對しては，幾らか遠慮といふ氣分が見えるけれども，土地の者に對しては所謂官風がとても激しい【布】[31)]。

そこに木村が権威主義とは逆の社会心性をスペイン人が持っていると思わせるニュアンスをいれる。

社會黨の本部を訪ねて行くのでも，とても警戒が嚴重で，信任狀も用意して行かなければ會はないぞといはれて，大衆黨の信任狀を持つて行つた。所が先方は信任狀は見なくてもいいといふ譯で，案外簡單に會つて呉れた【木村】[32)]。

このように，座談会はまずは経験に基づく話で推移していった。青木ばかりで

30）「座談会」pp. 78–79.
31）「座談会」p. 80.
32）「座談会」p. 80.

はなく，他の参加者から，自治の気運が高いバスクやカタルーニャなどの地域的特性への造詣が深い発言がみられるのは興味深い。

たとえば布は，内戦の原因の１つとして共和国政府軍を支持するカタルーニャにおける地域ナショナリズムの隆盛を示唆する。

> もう一つ原因があると思ふのは，カタロニア州のことです。カタロニア州は人種的に長い傳統を有つてゐる所で，バルセロナといふマドリードより大きい町の貿易港を控へて，まあ首府氣取りですね。（中略）叛軍が假令マドリッドを占領しても，當分バルセロナに根據地を作り，カタロニア州全體を味方にしてゐて，相當抵抗し得る地盤を持つから，この牙城を本當に奪ひ取られた時に全部が清算される譯であるが，併し全部清算するといふことはむつかしいことで，又直ぐにカタロニアは起き上つて來るといふやうな感じがするし，又カタロニア人は少し違ふやうですね【布】[33]。

またバスクについては布と木村のあいだに次のような発言がみられる。

> 木村　イルンは鐵道従業員組合の強力な所だから，陥ちさうなことが新聞に出てゐるが，仲々陥ちやしないと思ふな。
> 布　今朝の讀賣新聞に私が寫眞を載せてイルン解説をしてゐますが，人口は少いから大したことはないが，スペインにとつては相當惱みの種になつている。（中略）
> 木村　イルンの近くには鑛山か，何かあるんですか。
> 布　石炭が出るんです[34]。

しかし，このような布の発言は，内戦原因を追及するのではなく，バスク人女性の外見に関する男性のまなざしを提示することに落ち着いてしまう。彼の発言のあいだに笑い声が聞こえたことが記録されていることから，大なり小なり，

33）「座談会」p. 84.
34）「座談会」p. 86.

布のまなざしは座談会参加者に肯定的に受容されたと考えるべきであろう。

> バスク人と言へば女に奇麗なのが多い。女中もバスク人なら申分ない。一體に髪が多く，まあ色は濡れ羽色だね。（笑聲）眼も割合東洋人に近いし，皮膚も幾らか黄味を帯び，肉體美だから，よく日本人の畫家などが惚れるんですよ。モデルにも使つてゐるが，畫家のかぶるずきんのやうな，あれがバスク人のかぶり物で，ダブ〳〵したパンツなどもバスクの習慣です【布】[35]。

また，布は，スペインのジプシーについてもほとんど脈絡のないまま説明を加える。ジプシーの血が混ざっているスペインの人々にアラビア的要素が入り込むから熱狂的な人格が形成される，というのが彼の主張であり，そういったスペインは，日本からみた中国と類似していると述べるのである。そして，そういった考え方に青木が賛同する。

> 布　又世界を流浪するジプシーが隨分スペインに流れ込んでゐる。そこでスペイン・ジプシーが完成されて，藝術家になつてゐるやうだ。スペイン人の血液にはジプシーの血も流れてゐる。そこにアラビア的のメランコリツクなものが入つてゐますから，相當熱狂的で右か左か決めなければ承知しない民族です。日本人のやうな妥協的なことは一寸スペイン人には出來ないだらうと思ふ。結局スペインは奕世革命で，出て來たものを倒し又それが倒すといふ國柄で結局ヨーロッパの支那はスペインではなからうかといふ感じを有つたことがあります。
>
> 青木　確かに似てゐますね。
>
> 布　さうして不潔なことも支那人によく似てゐる[36]。

果たしてなにをもって2つの国が似ていると断言できるのか，科学的な根拠はない。しかも，布は，スペイン人は「不潔」なところが中国人によく似てい

35）「座談会」p. 87.
36）「座談会」p. 85.

るといった指摘を行っている。ここではスペインを論じながら中国に言及するという，対象のすり替えがおこっていることを見逃すべきではあるまい。

2–3.　内戦をめぐる国際情勢について

座談会参加者がそれなりに共通で大枠をつかんでいたといえるのは，内戦をめぐって列強がどのように関与しているのか，といった，当時の国際情勢についてであった。皆，ソ連，フランス，イタリア，ドイツなどの国々が自分たちの国益のため，内戦のゆくえについて思惑を巡らせていることを深く理解していた。

特に美濃部は，内戦を国際関係における諸国の利害に支配された戦争であるとしたうえで，共和国政府側が勝利した場合の未来予測を行った。

> 今度の動亂で政府軍が勝つたら，おそらくソビエート・スペインのできる可能性が多分にあると思ふ。それが共產主義國家である以上，資本主義國にとつては非常な脅威ですから，その點でイギリスがどつちつかずの態度を取らざるを得ないんぢやないかと思ひます。若し革命軍が勝てばジブラルタルをイタリアに持つて行かれる心配があり，どつちに轉んでもイギリスに取つては餘り好都合な條件には行かないから，決然たる態度が取れないんぢやないか。その點はフランスも同じで，初めは政府も人民戰線の政府軍を援助して武器なども送るといふ態度を取つたけれども，しかし段々革命の進行に連れて，どうも政府軍の勝つた場合には共產黨の國ができるんぢやないかといふ怖れが增して來て，フランスが人民戰線政府であるとは言へ，矢張り資本主義國家であることは事實であるから，人民戰線政府には勝つて貰ひたいが，徹底的に勝つて貰ひたくはないといふ妙に生ぬるい態度になつてゐると思ふ。【美濃部】[37]。

37）「座談会」p. 92.

横田は，列強各国がそれなりに勢力均衡でいる必要性を感じていることを論じ，それでもソヴイエト的な政府がスペインにできたとしても，国際社会での大きな拒否反応は生じないだろうと予測するのであった。

> まあ外部から來るものは兩方同じ位ではなからうかと思ふのです。兎に角政治的な關係から，その背後にある勢力は殆ど同じやうなもので，片方が力を入れゝば，又他方も入れるだらうし，その二つの勢力が對抗して，バランス・オブ・パワーがある間は，一方からは非常に入り，他方からは入らぬといふことはないだらうと思ひます【横田】[38]。

このように，横田と美濃部，東京帝大卒の 2 人は，直接的な現地での体験に基づくのではなく，アカデミックな議論を展開しようとしたのである。また，左派ミリタンとしての美濃部の思考は，次のような発言に凝縮されていよう。

> スペインソヴィエートができれば各國に影響する所は重大だと思ひます。若し人民戰線が勝つたとすれば，フランスの人民戰線政府は特に共產黨の色が濃くなるし，もう一つはアフリカの英・佛の植民地に共產黨勢力が扶植される。その二つの點で相當重大な意味を有つし，それに對して他の國も相當强く働きかけねばならぬやうな情勢が出て來るのではないかと考へるのです。勿論ロシアの通りの國が出来るか出来ないかは別問題として，それに似たやうなものが出来たとしても，今年の初から，ヨーロッパの左翼的傾向が强くなりつつあるし，ベルギー，オランダ，スヰス當も随分社會主義化してゐるし，さふいふ風なものに對する影響が相當スペインの革命をして，重要な意義をもたしめる要素となるのではないかと考へます【美濃部】[39]。

美濃部の発言に対して，左派よりも右派の方が戦争協力に積極的であるというのは町田である。そして，町田，布は，内戦がもたらす結末について楽観的と

38）「座談会」p. 96.
39）「座談会」p. 96.

もいえる結論を導き出している。以下に見てみよう。

町田　大體ドイツ，イタリアの方が積極的でせうね。スペインに脅威を感ずるといふよりも，アフリカの植民地問題といふものが肚の中にあるから，英佛が大したことはやるまいと多寡をくゝつてゐるし，まあこの後はムッソリーニ，ヒトラーの芝居が何處迄行くか，もう少し形勢を見なければ判らぬですね。

記者　その芝居が世界戰爭に迄發展しやしないかといふやうなことに付て……

町田　それはないですね。僕は其處迄行くやうなことは斷じてないと思ふね。間違つたら，評論業を罷めるんだね。（笑聲）

布　私もこの結果が世界大戰を呼ぶとは想像されないですね[40]。

こうして，町田と布は，内戦は地域限定的に終結するとの見通しを示し，且つ町田は，世界大戦に発展することはない，この予想が異なっていた場合には，評論をやめるとまで発言しているのである。しかしながら，彼らの主張には根拠は乏しく，実際に町田の予想は大きく外れたのであった。

2–4.「革命好き」はスペイン人の気質である

このように座談会記録には，それなりの科学的根拠に基づいて展開された部分と，あきらかにそうではない部分が混在している。たとえば，スペイン人の気質を革命好きと呼ぶなどは，後者の代表例であろう。木村は，ソフィア・カサノバ[41]という一人の女性の行動から，スペイン人は皆革命が好きだということを演繹する。

40）「座談会」pp. 96–97.

41）ソフィア・ペレス・カサノバ・デ・ルトスラウスキ（Sofía Pérez Casanova de Lutoslawski, 1861–1951）は，スペイン北部ガリシアのア・コルーニャ生まれの詩人，ジャーナリスト。ロシア革命・第一次世界大戦では特派員として活躍した。1887年にポーランド貴族と結婚，以降人生の多くの時間をスペイン国外で過ごした。反戦，

木村　スペイン人といふのは一體に革命が好きなんですね。日露戰争の時にもソフイヤ・カサノヴアといふ婦人は革命が好きなばかりに明石將軍から金を貰つたりしてゐたが，今でも生きてゐますか。

青木　どうですか—

木村　僕が行つた時は居ましたが，あれは革命がしたいばかりに日露戰争のとき，ポーランド人と結婚して相當やつた。

布　スペインでは闘牛を廢止したらどうだらうといふと，そんなことをしたら革命をやつてしまうといふんだから，革命は實際好きなんでせう。テキパキしてゐて，右か左か，結論をつけなければ止まんのだから。

青木　仲々個人的な考へも發達してをり，感情的でもあり，それに負けん氣だ。人と爭ふと，どん栗の背較べを隨分やりますから，どうしても革命に走り易い氣分をもつてゐますね。

布　女の喧嘩などでも，とても激しい。男の喧嘩と同じことをやるんです。あゝいふ所を見ても，相當革命氣分を包藏してるやうに思ふな[42]。

まず木村がカサノバという女性に対して，革命がしたい故にポーランド人と結婚したという思い込みを露呈し，そこから布が発言して闘牛に論点をすりかえた。そして激しさを共通項として，青木・木村・布の 3 名がスペイン人は本質として革命気質を持ち合わせているという科学的には根拠のない論を展開する。

また布は，スペイン人を熱狂民族と呼び，しかしその熱狂の中にも組織と伝統があると述べたうえ，人間の長所と弱点を極端に備える民族としてとらえる。その熱狂のたとえとして，女性が出来の素晴らしかった闘牛士に熱烈な意思表明をする情景を挙げる。

それから女の熱狂振といふものも凄いもので，一番華やかにやつた闘牛士

平和主義で知られる。Janet PÉREZ, Maureen IHIRE (eds.) (2002): *The Feminist Encyclopedia of Spanish Literature, N-Z*, Westport & London, Greenwood Press, p. 487.

42) 「座談会」p. 87.

に飛び降りて行つて花束を投げるのは勿論だが，盛にキツスをする。だから，相當なものですね【布】[43]。

このような発言は，布自身が旅をとおして抱いた皮膚感覚としてのスペイン観に基づくものであることは間違いあるまい。そして，少なくとも読者の一部には，未知のものへの探求心から，このような情報が提供されることを好ましく思った者がいたことも推察できる。

2–5.　スペイン人の時間感覚を評する

スペインを実際に訪れてスペインが好きになったのだという木村は，政治の「スピード感」について次のように述べる。

僕の感じで言ふと，スペインはてきぱき物事をやるやうです。日本では電力國営でも愚圖々々してゐるが，例へば，リベラは非常な賭博打であつたのに，リベラが政權を取ると，直ぐ國内の賭博を禁止する。又女が非常に好きだつたのに，女の不埒なことは禁止するといふやうな工合で，非常にてきぱきしてゐる。こんなことでも，日本だつたらてきぱきいかぬだらう。今度の動亂の原因も左翼が地主や僧侶に對して餘りやり過ぎたから起つた。なんでも非常にてきぱきやつてゐる気がする【木村】[44]。

と述べる一方，そのスピード感と市井の人々の生活のあり方とを照らし合わせたときの失望を隠さない。

木村　スペインは圖書館でさへ午前中二時間，午後二時間しか本を見せて呉れないが，全體はあんなに遊んでゐてどうして食つて行けるんですかねえ。

43）「座談会」p. 85.
44）「座談会」pp. 80–81.

ともつぶやいている。それに反応したのが青木であった。

青木　悪い習慣でしてね。時間を改めるのがスペイン改革の最初だといふんですが，その通りです。

そこでそのような時間帯で日常が推移する理由は暑いからだろうかと尋ねる記者の発言があり，青木がそれに再度，根拠の不確かな憶測を交えて答えている。

記者　暑いからぢやないですか。
青木　暑いといふことが自然的習慣になつたんでせうが，北の涼しい所へまで段々その習慣が傳つて行つたやうですからな。
布　晝寢の習慣もありますね。役所へ行つても十二時から四時までは受付けてくれない。銀行會社も同様駄目。商店でも大きいところは開いてゐないし，隣人でも晝寢をしない奴には交際はないから，晝寢をするというやうな具合に，まるで晝寢の國だ[45]。

こうして，座談会参加者は，内戦の進展状況とは全く関係ないところでスペインの生活習慣に不満を述べていた。彼らの体験談は，当時の多くの読者にスペインに対する不正確な情報を与えるのには十分な役割を果たしたであろう。

おわりに

1937年7月以降は盧溝橋から始まった日中戦争が日中全面戦争へと拡大するにつれ，一切の進歩的評論家の活動は禁止されることになる[46]。1938年2月，前年から始まっていた人民戦線事件の第二次検挙により，美濃部亮吉が検挙され，その後法政大学での職務からの辞職を余儀なくされたことはよく知られた事実である。

1937年9月の「国民精神総動員計画要綱」発表とともに，内務省は有力雑誌

45）「座談会」p. 87.
46）松原一枝『改造社と山本実彦』南方新社，2000年，p. 173.

社の社長を招いて，同要綱の趣旨説明と出版界への協力要請を行なった。この時招集された人々の中には改造社の山本実彦も含まれる。出版界は自主的な国策協力へと舵を切るとともに統制へむけて動きだし，徐々にではあるが，思想的に興味本位，自由主義，個人主義などを排除する戦争遂行体制へ組み込まれていったのであった[47)]。

本稿で参照した座談会は，戦時統制のもと，戦争遂行のために自主的に政治と協力する方向へ社の方針を切り替える直前の『改造』のある種の「迷い」を代弁しているように思える。「スペイン内戦」をめぐり，理論的な説明を試みようとする者と，とても科学的とはいえない根拠のもとに，スペインの現実を描こうとする者。しかしその双方が，本来的には左派が左派たるゆえん，活動家が活動家であることによる行動規範のなかの「革命」という用語を使ってスペインでおきた軍部クーデタを捉えていることから，1936 年 2 月に 2.26 事件を経験した日本の社会心性に大きく影響を受けていたと考えられる。スペイン内戦勃発時には，日本政府は防共路線のため，スペイン内戦におけるソ連の動向をとらえ，対ソ戦略の伏線をひいた，といわれる。そのような状況では，スペイン内戦のゆくえを予測することは暗に日本の未来を予測することにもつながっていた。座談会参加者は，スペイン内戦を広く知らしめることを課題とした場で，ステレオタイプのスペイン像を提示した。そうやって読者の期待に応える一方で，結果として，内戦のゆくえについては，あいまいな予想を与えることしかできなかったのであった。

43） 吉田則昭『戦時統制とジャーナリズム』昭和堂，2010 年，pp. 183–184.